

修了するにあたって

曾根 浩司

私が新潟大学に入学してからもう9年の月日が経とうとしている。振り返れば、入学する前までは「将来、自分が何をしたいか?」という問いに対する具体的な答えをもっていなかった。大学で化学をもっと勉強したいという思いはあったが、自分が本当にやりたいことが大学で見つかるのだろうかという不安もあった。

大きな転機となったのは、4年生になり研究室に配属され指導教員である八木先生の指導の下、卒業研究に取り組むことになったことであった。先生には時には厳しく、時には優しく研究の指導をして頂いた。そこで「研究とは何ぞや」を教えて頂き、研究に対する興味が深まっていった。そして、研究室での経験を通して「研究」という「自分がやりたいこと」を見つけることができた。これは、これからの人生において大きな財産であると思う。最後に、この場を借りて家族、友人、先生方、先輩方、これまでお世話になった全ての方々から感謝申し上げたい。



研究室のメンバーと 本人は後列右から2人目

新潟大を修了するにあたり

高野 智洋

博士課程は本来4年間のコースであるが、1年間短縮して、私はこの3月に3年次で修了予定である。振り返ると大学院生活はチャレンジの連続であって、毎日が瞬間に過ぎていった。国内外の学会での発表では、普段論文で名前しかみることができなかった先生に実際に会って話せて感動を覚えたことがあった。冷や汗をかいたような気もする。研究は日々の積み重ねであるが、方向性と到達点を定めることが困難で、立ち止まることも間々あった。論文を作り上げるといふ重圧は大きく、採択された時は本当にうれしかったが、やっとこれで解放されたという気持ちが大きかった。この3年間はまさに自分との戦いであった。修了できるのは、これも偏に教授を始め、教室のスタッフの指導と協力があってからである。感謝の気持ちで一杯である。

大学院博士課程で学んだ多くを今後に活かし、自らを着実に成長させる糧にしていきたいと思う。新潟大学で学べたことに感謝致します。



研究室のメンバーと 本人は後列右から4人目

特集

新潟大学を語ろう

～旅立ちの日～

Message

退任する教員からのメッセージ

理事(教育担当)・副学長
河野 正司

人文社会・教育科学系
(大学院現代社会文化研究科)教授
小林 昌二

理事(研究担当)・副学長
板東 武彦

人文社会・教育科学系
(大学院現代社会文化研究科)教授
井上 正志

人文社会・教育科学系
(教育人間科学部)教授
小林 昭三

自然科学系
(大学院技術経営研究科)教授
柘田 正美

自然科学系(理学部)教授
金子 恒雄

災害復興科学センター教授
青山 清道

自然科学系(理学部)教授
小林 迪助

自然科学系(理学部)教授
渡辺 勇一

自然科学系(理学部)教授
山岸 宏光

歯学部(医学部)教授
石原 清

自然科学系(工学部)教授
丸山 武男

自然科学系(工学部)教授
田口 洋治

自然科学系(工学部)教授
大熊 孝

自然科学系(工学部)教授
小林 敏志

自然科学系(農学部)教授
荒谷 明日兒

自然科学系(農学部)教授
池田 武

新潟大学への思いを語っていただきました。
長きにわたって
さまざまな研究を行い、
学生たちに多くを教えてきた先生方。
この春退任される先生方に、

理事(教育担当)・副学長



河野 正司 KOHNO, Shoji

五十嵐を退職するにあたり

二年前に歯学部(医歯学総合研究科)を定年後にも、本年1月31日まで理事(教育担当)・副学長として勤めさせていただき、新潟大学における15年間の生活を終えることができました、感無量です。旭町における教育・研究・臨床に加えて、5年におよぶ五十嵐の大学本部における仕事が与えられましたことは、私の「青春の終焉」を今日まで延ばすことが出来てきたのみでなく、非常に得難い種々の貴重な経験をさせていただきました。

全国に広く認知されてきた新潟大学の教育改革において、その中核をなしている全学教育機構の発足と活動に携わり、新潟大学の教育ブランドの確立にいささかの貢献が出来たのであれば幸いです。

国立大学が法人化した現在、学ぶ者にとって魅力がない大学は、教育と研究面の衰退を意味しているだけでなく、大学としての経営基盤を失っていく道を歩んでいくことになりましょう。この意味からも教員は、入学志願者で列が絶えることのない魅力ある教育・研究成果を造り、入試、教育を担当する学務系事務組織と共同して大きな働きをして下さることによって、大学の未来が開かれていくと思っています。

多くの方々に戴きましたお支えに心から感謝申し上げますとともに、新潟大学のさらなる活躍を祈念申し上げます。



学長、全学教育機構長等による「全学教育機構」看板上掲式

理事(研究担当)・副学長



板東 武彦 BANDO, Takehiko

新潟大学を退任するにあたって

長年お世話になりましたが、1月末で退任します。多くの方々にご支援を賜りありがとうございました。皆様のご協力のおかげで、大学法人新潟大学が真の大学として活動できる基礎を築けたと考えています。私は研究担当ですが、大学評価、国際交流、知財・産学連携、情報処理など副学長・センター長の方々が担当されたものを役員会で代表しました。これらの活動を通じ、大学経営という新しい世界を垣間見たことは貴重な経験でした。

個々の研究は、先生方が独自に進めるものですが、拠点性の高い研究や異分野が融合する学際研究は大学が組織とし

てお手伝いする必要があります。その1つが超域研究機構ですが、おかげさまで20名の優秀な新進の研究者を採用できました。各プロジェクトは短時間のうちに業績を上げています。人員配置はまだ不十分ですが、皆様のご協力に感謝し、今後のさらなる発展を祈ります。プロジェクト推進経費・戦略的教育研究経費もおおむね効果的な配分ができたと考えています。

これから別の人生を送りますが、大学のお役に立てることがあれば、お声をお掛けください。微力ながらOBとして協力させていただきたいと思います。

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授



小林 昭三 KOBAYASHI, Akizo

新潟大学を
退任するにあたって

1973年の4月に教育学部の長岡分校に赴任してから35年になる。3月に赴任打ち合わせのため初めて長岡に来て、前任者から物理教育の一切を引き継ぎ(教養・専門・実験)、新潟本校4年の演習、理学部(五十嵐)の院生ゼミ、などを引き受けた頃の幾つかの出会いが鮮やかに想起される。赴任時には長岡市に工学部と教育学部長岡分校とがあり大学らしさをなんとか維持していた。当初から地域・学部・大学を超えた協力によって、地方の大学における厳しい環境でもなんとか展望が持てた。

1981年には悲願とされた五十嵐地区への統合移転が実現し、総合大学における教育と研究の基盤が整った段階にやっと到った。今日までの35年を振り返って、特に先見性を欠いた



06 ASPEN高松WORKSHOP

想いがしてならないのは教養教育システム崩壊の歩みだろう。各学部の犠牲において創られた教養組織は国の教養解体政策により94年に崩壊させられたが、昨今では学力低下に対応する教養的教育が囑望される皮肉な状況になった(大学法人化前後の絶え間ない組織改編では10年先の先見性は夢幻とされた)。されど新潟大学は捨てたものじゃなかった。さすが新潟大学だと言わせるような好い思いを最後にはなんとか味わうことができた。今後における新潟大学の確かな発展を祈念して、謝辞に代えたい。

自然科学系(理学部)教授



金子 恒雄 KANEKO, Tsuneo

新潟大学における一風景

1969年大学紛争真っ只中の西大畑キャンパスに、新潟大学理学部助手として赴任した。しかし、新潟大学との関わりは8年前にさかのぼる。つまり1961年新潟大学理学部物理学科の学生として入学した。学部生時代の最大の出来事は、1964年の新潟地震である。

1965年卒業の年に、新潟大学理学部に大学院理学研究科(修士課程)が設置され、そこに1期生として入学し、研究者の卵としての第一歩をふみだした。1967年から1969年の2年間を東京大学大学院(博士課程、2年中途退学)で過ごした後、再び新潟大学に戻ったことになる。

1969年、下っ端教員であったが、多くの時間が大学紛争対



理学部旧校舎

策の為の会議に費やされた。幸いそれも収まり、翌年理学部は五十嵐キャンパスに移転した。移転当時のキャンパスは五十嵐砂漠と称されたように、風が吹くと砂塵が舞うような状態であったが、それも植樹された木々が育ち、数年後には落ち着き、研究するに相応しい環境になってきた。1995年、理・工・農による自然科学研究科がスタートした。

定年を迎えるにあたり、これまで私を育ててくれた新潟大学に深く感謝するとともに、新潟大学が一層発展することを願っております。

自然科学系(理学部)教授



小林 迪助 KOBAYASHI, Michisuke

「固体イオニクス学会」とともに

本学の大学院修士課程を出したのが1968年。それから、他大学の博士課程に進んだあと、私大に就職し、1973年の秋に再び本学に戻ってきました。そして日本が高度成長を遂げた昭和の後半から平成の今日までを本学にお世話になりました。この間、「固体イオニクス学会」の立ち上げ及びその後の運営に協力して来ました。年一回行われる学会名は「固体イオニクス討論会」でして、一件当たり、発表+質疑討論=25分です。これは前身の「固体イオニクス・ガルバニ電池研究会」の頃からの伝統でして、討論することが大切であることを守り続けているためです。年に数回の研究会が組織されます。ヨーロッパ、米国、アジアなどで開かれる固体イオニクス関連の国際会議の日本



南カリフォルニア大学内で親友の同大学教授ブリヤ・パシタ氏と

側窓口にもなっています。出版社はELSEVIERとSpringerが対応してくれて雑誌”Solid State Ionics”と”Ionics”が関連雑誌です。2007年の12月に東工大のすずかけ台キャンパスで固体イオニクスの物理系の国際会議2ndICP-SSIが開かれましたが、国内外から160名余の参加者がありました。この学会には本学大学院出身者の佐久間隆茨城大教授、高橋東之次城大教授、安仁屋勝熊本大教授、臼杵毅山形大教授、下條冬樹熊本大准教授など多くが活躍しています。新潟大学の益々の発展をお祈り申し上げます。

自然科学系(理学部)教授



渡辺 勇一 WATANABE, Yuichi

もう一度歩むであろう、
私の選んだ道

常に業績に追われる科学の世界に身を置いた人生で、同業者とは一度も話し合えなかった事がある。それは、昔から何度も耳にし、最近読んだ「科学者という仕事」という本でも強調されていた戒め、即ち「研究者は研究以外の何事にも入れ込むべきではない」という忠告である。枕元に常にメモを置いていた福井謙一氏、今年のセンター試験に出題された心臓への自律神経の作用を、夢のお告げ(しかも二夜連続!)に従い実験したLoewi氏の例を見ると、創造へのエネルギーは、研究外の営みに無駄に使えば消えてしまうのかも知れない。上の教養を何度も耳にしたのに、私は多大の時間を均衡を外して趣味に費やしたと自覚する。しかし、もう一度科学者をやり直す身と



卒業謝恩会(東映ホテル)の余興で「威風堂々、第一番」(エルガー)演奏

なり、趣味を断ち切って研究への集中を強制されても、多分今の人生と同じ道を辿ると思う。趣味で始めたとはいえ、舞台上立つ機会が頻りに訪れ、内向性の強い私には辛い機会だった。だが、後年この舞台度胸は、授業で学生を統御する精神の面で生かされ、また国際学会発表の表現し難い緊張にも何とか耐える度胸をつけてくれたと言える。何より「arts」の豊かさを知らずして何のための人生かと断言したい。

自然科学系(理学部)教授



山岸 宏光 YAMAGISHI, Hiromitsu

新潟大学での9年間の研究と教育を終えて

本学へ赴任したのは、1999年4月でしたから、退官する2008年3月で丸9年となります。赴任したのは理学部自然環境科学科で、担当は環境地質学でした。教育としては、人間生活と関連のある地表現象を学生が理解できるように、地形解析や空中写真判読技術の習得などに力を入れてきました。研究では、地すべりや崩壊などの斜面災害やそれに関連して中山間地の棚田などの環境変遷の問題についても取り組み、GIS(地理情報システム)を活用した研究を、学生とともに行ってきました。2004年には2大災害が発生して、(社)日本地すべり学会会長として、何度かの調査団長を、また、2006年には新潟大学災害復興科学センター防災部門長を拝命しました。私の研究室では、

山岸研究室のスタッフや学生



9年間に博士(論文博士3、課程博士1)を4名、修士課程6名(うち3名が中途退学で公務員や教員に就職)、学士課程19名を輩出することができました(写真)。

最後の年の2007年4月には自然科学系附置の環境・防災GISセンターを立ち上げ、2007年11月26日には、本学の国際戦略本部の協力を得て、国際会議「第1回国際GISフォーラムNIIGATA」を開催しました。また、2006年から本センターに「空間情報実習室」を開設して、学生の実習や社会人のための講習に活用されています。本センターが今後新潟大学の東アジアなどに向けた拠点のひとつとなることを期待しています。これまでご協力いただいたみなさん感謝します。

医歯学系(医学部)教授



石原 清 ISHIHARA, Kiyoshi

新潟大学を退任するにあたっての思い

医学部第三内科に11年間、医療技術短期大学部ならびに保健学科に23年間、人生の半分以上を新潟大学とともに歩んできました。本学と私とを結びつけたのはある血清検査でした。東京の病院での卒後研修中、慢性の黄疸と痒みを訴える女性を受け持ち、精査をすすめる中で、ある抗体検査を新潟大学第三内科にお願いすることになりました。患者様の血清と資料を鞆に、特急朱鷺に片道5時間揺られて、冬の日新潟駅に降りました。これが契機となり市田文弘教授に師事し肝臓病を研究することを決心しました。昭和49年から11年間、師市田文弘先生からは研究面だけでなく広く臨床の指導を受け、病気だけでなく病める人を診ることを教わりました。

ミャンマー国際看護研修に随行して(マンダレーヒルにて)



その後御縁があり、当時の医療技術短期大学部に赴任することとなりました。浅い教育経験の中で、教壇に立ちましたが、教科書は使用しないこと、スライドは使わないこと、板書を原則とすることは肝に銘じていました。今は板書からプリント中心の講義となっていますが、他は執拗に続けてきました。下手な字での講義に、難しい筆記試験に、冷房のない猛暑の中での授業に耐え、そしてついてきて下さった卒業生ならびに在校生の方々、皆さんと出会ったことを喜びと誇りにしております。そして同僚の先生方、事務の方々、患者様、皆さんからは多くを教わり何度も助けられました。長い間ほんとうにありがとうございました。皆様方ならびに新潟大学の益々の御発展を祈っております。

自然科学系(工学部)教授



丸山 武男 MARUYAMA, Takeo

新潟大学を退任するにあたって

長年お世話になったお礼に、自分の教育経験を書き記します。ここ十年、“如何にして学生を講義(授業)に集中させるか、学ぶことの楽しさを体験させるにはどうすべきか”という命題に対する方策の一つとして、レジュメとQ&A(学生からの質問事項とそれに対する回答をプリントした質問回答集のこと)を組み合わせた講義を行ってきた。2006年度からは、予習レポートを課すことで、半ば強制的に自学自習の習慣を身につけさせることを試みている。2年目の今年、アンケート結果などから推察

するに、予習レポートを課すことが授業の理解度向上に直結することが明らかとなった。

一方、Q&Aを活用したマーケティング(学生の要望・意見・考え方を収集)の結果から、昨今の学生気質も分かってきた。「①点数に極めて過敏、②まじめ、③視野がやや狭い、④やや線が細い、⑤国語力が弱い」という人が多くなってきている。優れた人材として輩出するためには、これからの教育は、専門教育のみならず、人間教育にも力を入れる必要がある。人間教育は、やれば着実に効果が出る。ぜひ、専門教育の中に人間教育を取り入れる工夫をして欲しい。新潟大学の卒業生が社会に出たときに世間からより高い評価を受けられるように…。

おわりに、皆様方のご健勝と新潟大学の益々のご発展をお祈りいたします。皆様の温かいご支援のお陰で、長い間勤務させて戴きありがとうございました。心から謝意を表します。



研究室の合宿研修(2007年9月28日)

自然科学系(工学部)教授



田口 洋治 TAGUCHI, Yoji

化学工場の事故と安全教育

この写真は廃プラスチックから油を精製するプラントのスナップです。化学工学を専攻した人は、一度はこのような大きな複雑なプラントを作りたいと夢見ます。この種のプラントはどんどん大型化され、日本経済を支えています。

この写真のプラントは、不幸なことにかつて火災事故を起こしました。私も事故調査委員の一員として参加し、火災事故の原因究明に当たりました。いろいろ原因が検討されましたが、冷却用ポンプの容量不足という初歩的なミスが最終結論の一つでした。その後ポンプの容量も補強され、今日まで無事故運転が続いています。

このような化学工場のプラント事故は、最近でもセルロースの爆

油化プラント



発事故、メタンガスの発火事故、油爆発事故、煉瓦崩落事故等と続けて報道されています。事故で亡くなった方々もおられ、誠に気の毒なことです。亡くなった方、怪我した方の多くは、何と下請けや孫請けの出向社員です。正社員よりもプラントを熟知していない人々が被災しています。

化学工学を習得した卒業生諸君の大部分は、正社員として入社し、下請けを依頼する立場にたつと思われま。重大な交通事故では、加害者も被害者と同様に大きなダメージを受けます。そのような加害者にならないためにも、その職場に相応しい適切な「安全教育」に全力を尽くして欲しいと思います。元気にご活躍下さい。

自然科学系(工学部)教授



大熊 孝 OKUMA, Takashi

川の自然環境保全の 一つの思い出

私は太平洋岸で育ち、31歳で新潟大学工学部に赴任したが、当初6年間は統合移転前で長岡に住んだ。ここでまず山ウドと日本酒のおいしさに感激し、それ以来日本酒党になった。また、信濃川などにサケが遡上するのを見て、火焰土器に代表される縄文文化の源泉が川にあることを悟った。私の専門は河川工学で、それまでは川を敵視し、コンクリート護岸やダムは当然と考えていたが、それ以後、川の生態系を大切にす河川工学が必要であると考えるようになった。

こうして川の見方が変わると、いろんなことに気付き始めた。まず、越後を流れる川がなぜ「信濃川」なのか疑問になった。その理由は越後に信州からの移住者が多いからという説があるが、それにしても越後人は「お人好し」と思わざるを得なかった。

さらに、信濃川の中流部では東京電力やJR東日本の水力発電所があり、流水をほとんど取水し、信濃川は河原砂漠と化している。また、阿賀野川は尾瀬に至るまで17基のダム群で完全に水力発電のためだけの川に造りかえられている。しかるに、飯山線も磐越西線も電化されていないのである。

このお人好しさは、信濃川の水を関東分水するJAPIC計画に、謙信が信玄に塩を贈った故事にならい、賛成という新聞投稿にも現れていた。この計画に対して、君知事の指示で作られた「関東分水影響調査検討委員会」(委員長・茅原一也、昭和62年設置)に私も委員として参画し、中止することができた。今思い出すと、望外の成功であった。

自然科学系(工学部)教授



小林 敏志 KOBAYASHI, Satoshi

思い出すこと

大学院博士課程を修了した1970年に新潟大学に採用され、当時長岡市にあった工学部に勤務しました。時代はまだ高度成長期。工学部拡張ムードの中で学生と一緒に楽しく過ごしておりました。

しかし、工学部の新潟移転が完了した1980年頃から、いろいろ窮屈になってきました。学科新設もあまり認められなくなり、将来計画が求められ、大講座制への移行が促されました。

そんな中で、新しい理念の大学院自然科学研究科に設立当初から参加できたこと、高校生向けに、新感覚のA4版工学部パンフレットを若手教員と一緒に自前で作成したこと、高校生説明会(オープンキャンパスの学部版)を工学部が初めて実施したこと、工学部改組(学科新設など)や大学院自然科学研究科改



2年生合宿研修(1990年4月、下越スポーツセンターにて)

組に関われたこと、大学創立50周年記念事業と工学部創立80周年記念事業のお手伝いできたことなどが、楽しく思い出されます。ただ、学生と一緒に過ごせる時間が年々減ってきたことが残念です。

法人化による大きな変化が起きている今、大学を去ることになりますが、これまで皆様方から頂いたご支援を感謝いたします。併せて、新潟大学の発展と教職員・学生の皆様のご活躍をお祈りいたします。

自然科学系(農学部)教授



荒谷 明日兒 ARAYA, Akihiko

退職にあたって

新潟に来て7年、退職のときが来ました。酒、魚、米と3大好物に恵まれた土地での生活でしたが、夏のフェーン現象の暑さ、冬の曇を伴った大風には今もって馴染めません。

私の研究のフィールドは東南アジアで、赴任するまでは、年に3~4回回歩いていましたが、赴任後は年1回の出張になりました。この点、現場から遠退いたという不満はありました。しかし、これを補って余りある経験をしたことも事実です。

新潟大学在職7年のうち、学科長の1年を除いて、学務委員を6年(委員長3年)務めました。実業界から来た私にとって、学生との付き合いは新鮮でした。一時期はアパートの部屋が、学



2003年ゼミ旅行

生のたまり場のようなこともありました。新設した学生相談室にきた学生から後日、問題が解決したと報告を受けるのも喜びでした。日常、思ってもみなかったことを考えさせられることもあり、自分の人生経験として得るところが多かったと思っています。

春から神奈川県相模原に帰りますが、これからは「新潟ぶらり旅」の途中で、農学部にも顔を出したいと考えています。

自然科学系(農学部)教授



池田 武 IKEDA, Takeshi

有難かった自由な研究

本学に25年間お世話になりました。大学院を修了して9年間は地方の旧制大学に籍を置いていました。1講座は、教授、助教授、助手2、技官2の6名で構成されていました。当時は教授が絶大で、技官も年をとっている人ばかりで人間関係にずいぶん悩まされました。本学に来た時は、教授、助教授、助手でとにかく自由に研究ができ、有難かったです。途中で在外研究員が当たり、アメリカに行く機会を得ました。受入れのE教授は同年齢で、独身ということもあって、当地に行って驚いたことに、土・日曜日にも学校に来て仕事をしていました。論文数が多くて、特にトップネームが多くて、どうしてこんなに論文が書けるのかと思った次第です。滞在



修士修了授与式後みんなで…

中に別のB教授を訪ねる機会を得ました。彼は2人の子供がいる一般の家庭の持主でしたが、やはり土曜日に登校して自分の仕事をしているとのことでした。2人の教授とも各々技官が一人付いているのも良い研究体制でうらやましく思いました。こども教官に技官が付いていれば、もっと研究がはかどるのでないでしょうか。

それにしても、自由に研究ができて本学に来て有難かったです。本学の益々の発展を願いつつ…。

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授



小林 昌二 KOBAYASHI, Shoji

新潟大学を
退任することになったの思い

私は、12年の愛媛大学勤務の後、1986年運よく故郷の新潟大学に着任した。程なく88年に旧笹神村発久遺跡から出土した木簡・墨書土器の調査を皮切りに89、90年の新潟市的場遺跡・旧黒崎町緒立遺跡出土の木簡・墨書土器を、1990年の旧和島村八幡林官衙遺跡出土の画期的な養老年号を伴う「沼垂城」墨書の木簡等の調査研究に出会った。

私の本籍は新潟市沼垂である。これと同じ表記の「沼垂城」墨書は、『日本書紀』大化三年条記載の淳足柵が、沼垂城と表記を変えて存続したことを明らかにした。以後の出土物は『新潟県内出土古代文字資料集成』(2004)として刊行した。

だが、淳足柵・沼垂城はなお不明である。2000年から人文



沼垂城など八幡林官衙遺跡出土木簡をめぐる木簡学会新潟特別研究集会で(1994年9月24日新潟大学)

学部の歴史・地理・考古の先生方や旧積雪地域災害センターの高濱・卜部両先生に全国第一線の城柵研究者も加わった科研基盤Aによる調査チームを率いた。以後も本学プロジェクトや科研基盤Cで探求に邁進した。発見に至らないが着実な成果を上げて満8年に及んだ(『高志の城柵』2005)。

私は、新潟大学のよき計らいや同僚・地元の研究仲間、地元市民、自治体、マスコミ関係者らにも支えられて望外な調査研究に従事できた。この幸いに深く感謝したい。

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授



井上 正志 INOUE, Tadashi

新潟大学を
退任するにあたっての思い

いま振り返れば、恐らく私の人生の、精神的に旺盛な時期の大半は、新潟大学で過ごしたことになります。30歳代のはじめに、昔の教育学部高田分校に赴任して以来、退任を迎える現在まで、30余年を新潟大学に勤務することになりました。

今でも、私の記憶からぬぐい去ることのできない幾つかの得難い経験を、ありありと思い起こします。

まず、新潟大学に赴任直後に、「教育学部統合」問題に接することになりました。三地区の代議員会に出席する途中で、特急が新津の手前で大雪の中に閉じこめられ(当時まだ新幹線はなかった)、這々の体で家にたどり着いたこと、ドカ雪のた

め宿舎の二階から出入りした経験などは忘れられません。

統合後においては、「教育学研究科」の新設、「教育人間科学部」への改組、旧「現代社会文化研究科」の設置など、どの問題でも、制度疲労をおこした旧来の「教育学部」が新たな学部に脱皮せざるを得ない、悲喜こもごものドラマが繰り返られました。

もはや今となっては、総合大学における教員養成改革が、学部を超えて弛みなく続けられ、世に高い評価を受ける専門的能力を培いうる、新潟大学「教職学部・大学院」の実現が見られるように念願するばかりです。

自然科学系(大学院技術経営研究科)教授



榊田 正美 MASUDA, Masami

新潟大学での12年間

国会が住専問題で紛糾し、自然研改組の概算要求も巻き添えを食って、直前まで着任が決まらぬ波乱含みの平成8年4月に、大学院自然科学研究科に着任した。

それまで24年間、企業で研究開発を担当していた小生は、新職場でカルチャーショックを受けた。企業の求める学生像と学生教育の乖離、仕事の分担や前例ベースのやり方、全く地縁なしの産学連携、お金や設備なしの研究、処遇面でも…と、挙げればきりが無い。しかし直ぐに覚った。このギャップをしっかり認識し、プロエンジニアの目でエンジニアの卵を育て、また効率的な仕事の進め方・考え方を進言することが、小生のミッションであろうと。効果のほどは卒業生の今後の活躍に懸かるが、現在のところ研究室OBで転職者がごく少数なのが救いである。



研究室OB会(2007年6月16日)

最近、社会人教育を主にした大学院技術経営研究科(MOT)創設のチャンスを与えられた。企業の研究所での教育委員長長の経験を基に、企業人として育てて欲しい方向を提示し、実践力を養成するMOTが平成18年度より立ち上がり、軌道に乗つつある。我々の願いを体した卒業生が一人でも多く、彼らの職場でイノベーションを起こし、持続可能な経済発展に貢献してくれることを願っている。

大学や企業での41年間の研究生活を、周囲の皆さんに助けられ本当に楽しく過ごさせていただいた。ここに御礼を申し上げますとともに、新潟大学のより一層のご発展を念ずる次第である。



青山 清道 AOYAMA, Kiyomichi

新潟大学を退任するにあたり 若者に伝えたいこと

「少年ケニア」の発売日が待ち遠しかった。山川惣治の小説で、アフリカの奥地で象やライオンが躍動する姿、未知の世界への憧れ、冒険に対する熱気にあふれていた。戦後の長岡市で、焼け跡に建てられたバラック校舎の小学校で学んだ私にとって何よりの楽しみだった。中学校ではルイ・エモン著「白き処女地」を愛読した。17世紀に新天地カナダに移住、ケベック地方に定住したフランス農民の物語である。自然の美しさと厳しさが実に生き生きと描かれている。

いつか機会があったら、広大で奥深いアフリカやカナダの自然に触れてみたいという希望をもち続けて勉学に励み、昭和42年、新潟大学工学部に赴任した。

周囲の先生方のご協力をえて、昭和43年から約2年半、JICAの派遣専門家としてナイジェリア連邦共和国、国立ヤバ工科大学の客員講師として、土木工学科の教育や地盤災害調査にあたった。昭和55年から約1年、文部省在外研究員としてカナダ、マギル大学で雪氷工学の研究に従事することができた。



ガーナ医科大学の中庭で野口英世の胸像と(昭和44年)本人は中央

これらの経験を生かし、帰国後は留学生と交わるなかで、多文化共生社会の実現に向け微力を注いできた。“Where there is a will, there is a way”は、私の好きな言葉です。人類の明日を脅かす森林破壊や砂漠化等、環境問題が地球規模で表面化しており、いま日本が求められているのはグローバルな視点からの国際協力です。

“失敗を恐れずに夢に向かって思い切って挑戦してほしい”、学部、大学院時代は多くの試練に立ち向かう大切な準備期間です。

最後に、在職中にご指導、ご支援を賜った教職員、学生の皆様に感謝したいと思います。長い間、ありがとうございました。



ヤバ工科大学で講義(昭和44年)

全学講義開講

学生の総合的な知見を高めるため、学外から講師を招いて行っている全学講義。平成19年度に行われた「教師の力・教育の力」と「21世紀を生きる学びとは何か」を紹介します。

全学講義:1

「教師の力・教育の力」

●2007年12月6日(木)16時45分～19時30分 ●総合教育研究棟G410講義室

- 講師・演題 植村 鞆音(平成19年度日本エッセイスト・クラブ賞受賞)………「『歴史の教師・植村清二』を語る」
- 長谷川 義明(新潟愛郷会理事長)………「教育の力、教師の力」
- 鈴木 光太郎(新潟大学人文学部教授)………「旧制新潟高校教授・黒田亮先生のご業績」

社会的責任と教育効果の向上を目指して授業改善や教育改革の続く中で、ともすると「組織」や「制度」の改革、あるいは「教育技術」の向上に目を奪われがちになってははいないか、と、気付いたのが、この全学講義を企画したきっかけであった。もとより、授業の成果を計算しようという評価体制にあっては、学生が教師に接する中で、何かしかの感化を受け、自らの資質に気付かされたり、教師の姿に言葉では伝えることの出来ない何かを感じ取ったりするという、測ることの出来ない「教師の力」は捨象されてしまいがちである。かといって、Face To Faceの場で、教える内容や技術とは別に、学生に知的な触発、あるいは人生を生きるうえでの動機付けがなされるところに「教師の力」を見定めるなら、今日の大学の教員にあっては、そうした力、ある意味では人間性などは忘れられがちであるし、また学生にとっても、教師に接する機会と場がいかに限られているのが現状である。いや、学生と教員との間に人間的な交流を図ることなど難しいというのが、今では実情かもしれない。

しかし、自学自習や映像を通して学生の教育にあたるのではなく、生の人間としての教師が学生の前に自らの姿を晒して何がしかを語ることによって授業を行なう以上、「組織」や「制度」の改革もさることながら、

教員の「人間」としての力も問われることになるのではないかと、そのような発想から、この全学講義は企画・立案された。

折りしも、1960年代に本学の人文学部長をお務めにもなった植村清二先生の教師としての生き方を、ご子息の植村鞆音先生が描いた評伝、『歴史の教師 植村清二』(中央公論新社)が刊行され、2007年度の第55回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞された。そこでこれを機会に、今日、忘れられがちな「教師の力・教育の力」について考える機縁に出来ればと考えて、全学講義を実施することを思い立った次第である。



旧制新潟高校正面の映像と鈴木光太郎教授